

第2章 山

著者	佐藤 寛
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
シリーズタイトル	アジアを見る眼
シリーズ番号	89
雑誌名	イエメン：もうひとつのアラビア
ページ	50-83
発行年	1993
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00017815

第2章

山

山のてっぺん

イエメンはアラビア半島にある国なので日本人には「砂漠の国」としてイメージされがちだが、国土のおおかたは山岳地である。サナアの西の郊外にあるアラビア半島最高峰、ナービー・シユアイブ山の標高（三七六〇メートル）は、なんと富士山より一〇メートルばかり低いだけである。

特に旧北イエメンは国土の七割が山岳地で、国土を南北に貫く山並みが紅海に並行して連なっており、北はサウジアラビアまで続いている。南は徐々に標高が下がって旧南イエメン領に入り、最後にインド洋にいたる。この山脈の南の果てにあるのが南イエメンの首都であったアデンである。山脈の西側は紅海沿岸の狭い平野「テイハマ」があるが、山脈は急に壁のようにそそり立ち、紅海上空を飛んでいるとまさに絶壁のように見える。東側はアラビア半島の内陸部へなだらかに下って行き、ついには広大な砂漠ヘルブア・アル・ハリーーにまぎれてしまう。（口絵地図参照）

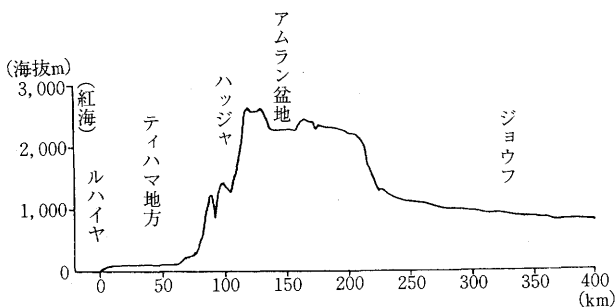
さて、イエメン国内を初めて旅行する人が最初に抱く疑問は「ほうぼうの山のてっぺんに四角い石のてっぱりがいくつもならんで見えますが、あれはいったい何ですか」である。イエメン人は当然のことのように「家です」と答えてくれるだろう。にわかには信じ難いかもしれない。しかし、倍率の高い双眼鏡を持っていたら覗いてみればいい。確かに家らしいということがわかる。

再び疑問がわいてくる。「何だつてわざわざあんな山
 のてっぺんにばかり住まなくちゃならないんですか」。
 もっともな質問である。高い所に住むのは、けっして伊
 達や酔狂からではない。イエメン人はわけあって「わざ
 わざ」山のとっぺんに住んでいるのである。それもでき
 るだけ高く、険しい山の上に住もうとする。人の住む山
 には段々畑が切つてある。その段々畑を見下ろすように
 集落があるのである。

なぜ高いところに集落があるのか。それは「安全」の
 ためである。高いところなら他人が攻めてきにくい。日
 本でも戦国時代、城は山城が基本であった。そう、イエ
 メンでは、集落はそのまま城なのである。

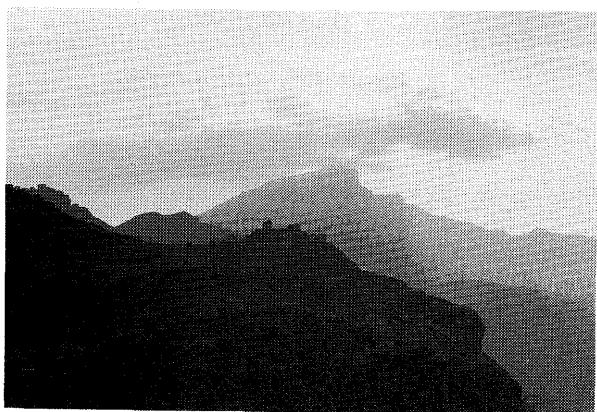
ここでわいてくる第三の疑問は「イエメンではそんな
 にしょっちゅう戦争があったのですか」である。そうな
 のだ。もっとも戦争といっても主として部族間抗争であ
 る。土地をめぐる争い、羊の放牧地の権利をめぐる争い、

北緯 15°40' の東西断面図



(注) 本書口絵地図のA—A'線の断面。

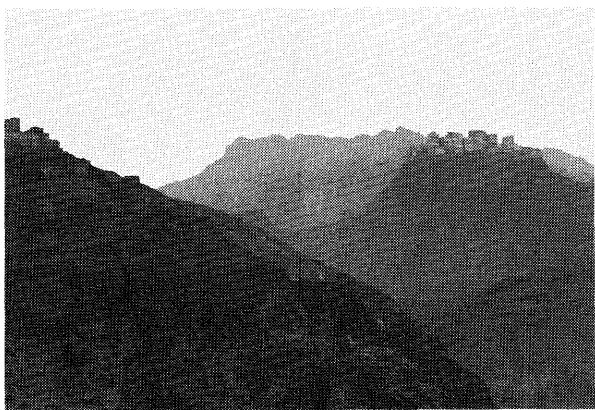
(出所) Dresch, Paul, *Government, and History in Yemen*, Oxford, Clarendon Press, 1989. 8, 図 I - 4。



手前の山並の中ほどと左側の山頂、および中央奥の山頂のギザギザが集落である。

わずかな水をめぐる争いは頻繁にみられた。そしてある部族の者が他の部族の者とケンカをして殺してしまったりすると、その復讐がさらなる復讐を呼んで、ついには多くの部族を巻き込む大規模かつ長期の争いに発展することもしばしばあった。一九六二年の革命後七年間にわたって続いた内戦も、部族間の争いが絡んだために長期化したのである。

もともとイエメンの歴史をひもとけば、ときには外国との戦争もあった。外国に攻めていったこともないではないが、外国が攻めてくる場合がほとんどだった。紀元六世紀にはエチオピア人がやってきてイエメンは五十年間キリスト教国であった。その後ペルシャ軍がやってきてサナアを支配したこともある。また十六世紀と十九世紀にはオスマントルコの占領も経験している。しかし、そ

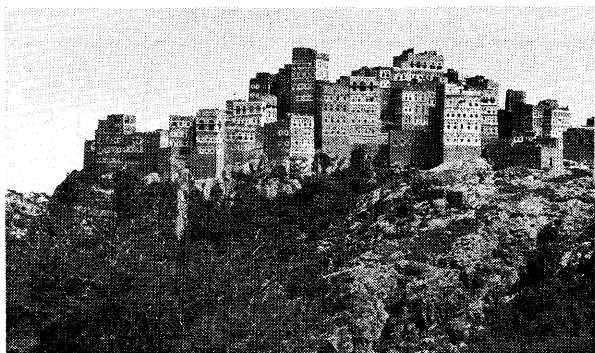


右の村と左の村との間には普段の往き来はない。いったん谷を下りて上らなければ相手の村にたどり着けない。

んなどきでも占領されたのは都市だけでイエメンの農村は常に外敵を寄せつけず、自分たちの部族社会を維持してきたのである。

イエメン人が山のでっぺんに住むようになってからすでに二千年近くはたっているのだが、この間大規模な人口移動はほとんどなかった。また他民族の大規模な流入もなかった。十世紀頃のイエメンの地理学者ハムダーニーが、当時の北部イエメンの部族名とその居住地を記録しているが、驚いたことに現在の部族名と居住地とほとんど同じなのである。つまり、彼らは先祖代々同じ山のでっぺんに住みつづけているのである。

だから山のでっぺんに住んでいるイエメン人に「なぜあなたはこんな山の上に住んでいるのですか」と聞けば、「父さんも、じいさんも、ひいじいさんもここに住んでいたから」と答えるだろう。



ハジャラの村。建物の壁が村の城壁を兼ねている。
右の横長の建物のかげに村の唯一の出入口がある。

つまり、そこに住むのがあたり前なのである。生まれ落ちた所が山のてっぺんだったのである。そして高い山が安全であるとすれば、高い山に生まれたものは恵まれていることになる。平地の国の人ならば大地主の息子に生まれ、広い土地を相続することが幸運であるように、部族抗争激しきこのイエメンでは高い山に生まれることは、その「高さ」を相続することを意味する。「広さ」は何人かの息子の間で分けてしまうと狭くなってしまうが、「高さ」はいくら息子が多くても減りはしない。高さは安全の保証であり、財産なのである。

部族間の戦闘になれば、戦うのは男である。男が守らなければならないものは女・子供・家畜・穀物などである。男は外に出て戦う。だから、留守中はできるだけこれらのものを守りやすくしておくことが必要となる。サナアの家がそうであるように、イエメンの地

方の集落も防衛のための構造となっており、家の中に家畜も穀物も女も子供もみんな入れるようになってゐる。そして、家は何軒かが互いに寄り添うようにして建っている。町の住居と同じで一階には窓がない。寄り添った家屋の壁は、それ自体が城壁のような機能を果たすのだ。外敵の侵入をできるかぎり防ぐことにイエメン人の田舎での生活のエネルギーのかかなりの部分が割かれている。だから、家は高い山のてっぺんにあるほど好ましい。

紅海へ下るサナアルホデイダ道路のちょうど中間くらいにマナハという宿場があり（口絵地図参照）、そこから少し入ったところにハジャラという村がある。この村は岩がちの絶壁の上にあつて、この村の六〇〜七〇軒の家はすべて寄り添つており、家の壁が村をぐるりと囲んで城壁の役目を果たしている。村には一カ所だけ門があり、その門以外からは蟻一匹入ることができない。おまけに村の下の斜面にはサボテンが生い茂つていて、外敵の侵入をさらに困難にしているのである。葉っぱの丸くて平べったいこのサボテンはウチワ・サボテンという種類で、同様な山岳国家であるブータンでも、やはり外敵の侵入防止の目的で山の周りに植えられているのだそうだ。山岳民族は互いに似ているという説を裏づける話である。

段々畑

イエメンの代表的な風景を一つだけあげると言われたら、ぼくは段々畑をあげたい。もちろんサナアの旧市街の細い路地も捨てがたいし、砂漠のなかのシバの女王の神殿跡もそうとうエキゾチックではある。しかし、イエメンといえばまず段々畑である。最近で

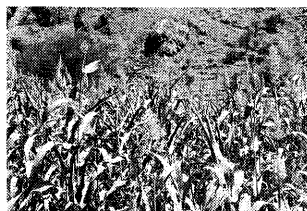
は外国人によるイエメンの写真集がいくつか出ているが、どの写真集を見ても、やはり段々畑はそのなかの目玉である。

イエメンの地方部はほとんどが岩がちの山また山の連なりなのだが、その急傾斜にへばりつくようにイエメン人は段々畑を切り拓いてきた。谷底から山頂まで細い段々畑がまるで等高線を見るようにずっと続いている景観は、陳腐な表現なのだが「耕して天に至る」という表現がぴったりである。

段々畑も数段ではない、数十段でもない、数百段なのである。下から上までずーっと、なのである。イエメンは農業国であり、かつ一年中水の流れている河川は一本もない。ほとんどがわずかな降雨に頼る天水農業でアワ・キビなどの雑穀類とコーヒーなどを生産している。少ない降雨を最大限利用し、日々の糧を得るためには段々畑を念入りに維持しなければならない。



イエメン山岳地方の段々畑



キビ類はイエメンでは「ズラ」と総称される。地方によってさまざまなバリエーションがある。

段々畑は、一段一段石を積み上げて階段状になっており、一段の幅はほんの一メートルしかないものも珍しくない。年に二度の雨期に暴風雨などがあると石垣が崩れることも再々である。早めに補修しないと、次の雨で水が勢いよく流れ、下の段へも被害が及び、次々と崩れていってしまう。かつての段々畑を示す石垣がわずかに残っているが、今ははげ山同然に岩がごろごろしている山もよく見かける。百段余りの段々畑はすべてが一人の所有であるものはいない。ほとんどのイエメン人は自作農だが、一人当りの耕地面積はわずかである。

山のとっぺんに集落がある場合、段々畑は上から作っていったのか、下から作っていったの

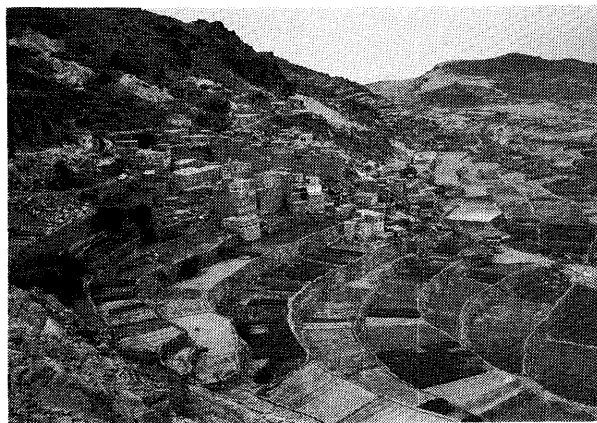
かは謎である。いずれにしても何年もかかってこつこつと積み重ねていったのは間違いない。

段々畑に植えられているものはイエメン中どこへ行ってもだいたい、キビカコーヒーか、カ
ートである。どこの段々畑も同じようなものだが、やはり地方地方でなんとなく雰囲気が違う。
数あるイエメンの段々畑のなかで最も印象的なのはハイマー地方の段々畑である。サナアから
西に約四五キロメートルほど走ると、ハイマーという地方に出る。これが、段々畑観光のスポ
ットなのである。別にドライブインがあるわけではない、展望台などもない。ただ、段々畑が
よく見える場所にすぎない。しかしたいの写真集には、このあたりの段々畑の写真が一葉
や二葉は必ず載っている、というような名所である。ぼくは日本からのテレビのロケがあると
きには必ずこの場所に彼らを案内した。このくねくね道の道端の数力所にポイントがあり、ど
の局のカメラマンもたいいこのうちのいくつかの場所に決まって三脚を据えた。つまり絵に
なる風景なのである。

サナアから出て道路は標高二八〇〇メートルくらいの高所を走っていく、くねくね道が突然
開けると道の両側にずっと下まで段々畑が続いているパノラマが開けるのである。谷底は見え
ない。茶色い岩がちの山の斜面に石造りのイエメン建築の集落があつちに一塊り、こっちに一
塊り、という具合に眼下に見渡せる。はるか下のほうの畑でロバが鋤を曳いていたり、こっち
のほうでは山羊の群れが草を食べていたりするのである。日本から出張で来たお客さんを、た

だこの景色を見せるためだけに連れて行くこともある。途中には段々畑以外にもないが、サナアの旧市街を案内するだけではイエメンが農業国であることを理解できない。ハイマールに連れていくというのは、イエメンの代表的な風景は段々畑だという真理をついた案内である。

こうした畑は短く見積もっても二千年はここにこうして刻まれ続けている。今せつせと畑を耕しているイエメン人の祖先が代々石を積み上げ、耕し、種を撒き、刈り取り、崩れては石を積み増し、また耕しという営為を延々と繰り返してきた証がこの段々畑である。怠け者が一代でもいれば、畑はすぐに崩れて、石がごろごろした元のただの急斜面に戻ってしまうのである。この畑は代々受け継がれ、そして受け継いだ者は誰しもこの畑が崩れ去らないように毎日汗を流してきたのである。



アラビア半島最高峰ナービー・シュワイブ山の中腹の段々畑。このあたりは標高3000メートル近い。

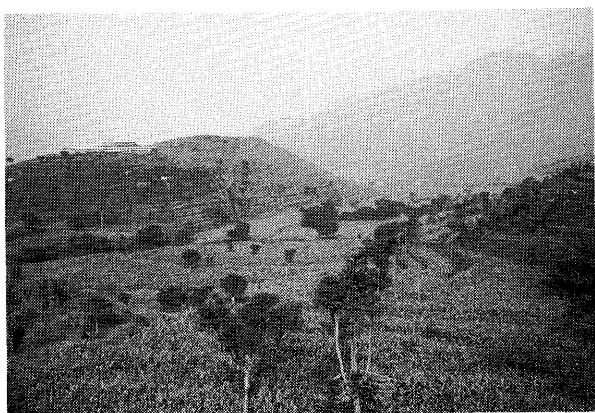
雨の少ないこの国で、土地のやせているこの地域で人々はこうして生き続けてきたのである。

段々畑を見る度にぼくはイエメン人が怠け者であるとは思って考えられない。この畑があるかぎり、イエメンの将来は捨てたものではないと思えてならないのである。やはり、イエメンを代表する風景は段々畑なのである。

緑 アラビアに緑したたる国がある、と言っても「アラビアⅡ砂漠」という条件反射のでき

あがっている日本人にはなかなか信じてもらえない。しかしイエメンは「緑のアラビア」である。イエメンはいろいろな点でわれわれの先入観を覆してくれる。

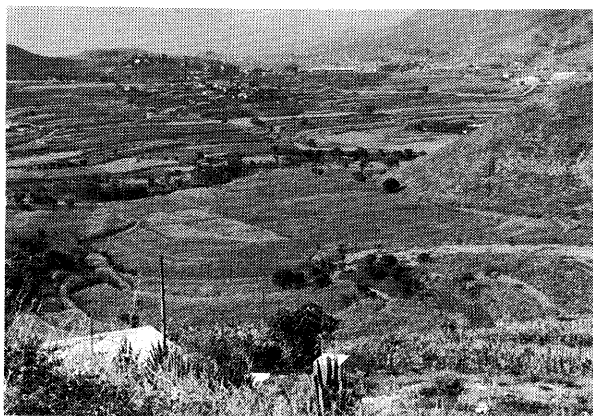
一九九〇年に大阪で「国際花と緑の博覧会—EXPO'90」があつて、イエメンも出展することになった。しかしイエメン政府にはお金がないからその準備のために、われわれのようなイエメンOBが何人かかり出された。ぼくはパンフレット作りを手伝ったのだが、そこにはこんな文章がある。「イエメンには、一年中水が流れるような河川は一つもありません。そこで貴重な雨水を無駄なく利用するために、三〇〇〇メートルにもほる険しい山々のふもとから頂上まで、まるで天に至る階段のように段々畑が積み上げられているのです。この段々畑で人々は主食となるキビ・アワ・ヒエ等を作り、僅かな平地では豆・胡麻・ジャガイモ等を育てています。山岳地から紅海へ下る道路沿いにはワディー（涸れ谷）があつてバナナやパイヤが生い茂り、紅海沿岸の砂漠平野では綿花・スイカが栽培され、またオアシスにはナツメ椰子の



1年で最も緑の濃い時期は7月～8月初旬である。キビの葉の緑がみずみずしい季節である。ジブラにて。

木がそびえています。山岳地でも砂漠でも『緑』は親から子へ、子から孫へと数千年来引き継がれてきたイエメンの何よりも貴重な財産なのです。」確かにイエメンには緑がある。だが緑のアラビアと言ったからといってそれは「世界一緑が多い」という意味ではない。周囲の国々と比べた時、「アラビアのなかでは」いちばん緑が多いということの意味するにすぎない。だから普通の日本人がイエメンの山岳地に突然立たされたなら「なんて緑の少ない、乾いた場所なのだろう」と思うかもしれない。実際、平均的な日本人の目から見たら、イエメンの段々畑の緑など大騒ぎするほどのことはない。

サナアからアデンへ向かう途中、南へ二〇〇キロメートルほど南下したところにイブという町がある（口絵地図参照）。このあたり一帯は「緑の



「緑の郷」 イブの8月。この地方には年間800~1000ミリメートルの雨が降り、アラビア半島で最も雨の多い地方である。

郷」とも呼ばれている地方で、車で通ると、同行のイエメン人が必ず、「ほらご覧下さい、ここがイエメンでいちばん緑の濃い地方です」と少し興奮気味に説明するのだが、日本から短期間出張で来ている人には、いったい何がすごいのかわからないだろう。

だが、緑が多いか少ないかは相対的なものである。アラビアにあつては、イブの段々畑はこの世の楽園とも思われるほどの圧倒的な緑の量なのである。他のアラブの国々にこれほどまで緑あふれる国は少ない。砂漠のオアシスには緑があるが、一歩オアシスを離れれば不毛の土地が続く。しかしここは連なる山の斜面がすべて緑なのである。初夏の頃、山一面がつやつやした鮮やかな緑色のキビの葉に覆われ、その葉が風に吹かれて揺らめいているさまは、茶色いごつごつした岩肌の光景

を見慣れた眼にはとても新鮮である。アラビアの地にこんな緑があり、それをシバの女王の時代からずっと守りつづけてきたことをイエメン人は誇りに思っているのである。

それにサナアに半年も住んでいると、われわれ日本人でも、やはりこの緑がすばらしく見えてくる。夏にイブを訪れると、どうしたって道端に車を止めて写真の数枚は撮らずにはいられない。緑のありがたさを思い知らせてくれるのがアラビアなのだ。

ところで、イエメン人に限らずアラブ・イスラムの人々は緑に対する憧れが強い。イスラムの色は緑と言われるが、これはイスラムの理想郷である天国のイメージが緑したたる楽園であることによるものだろう。緑へのあこがれは国旗のなかに現れる。カダフィ大佐率いるリビアの国旗は真緑



紀元前後にイエメンを支配した「ヒムヤル」王国の首都があったザファール。小麦畑が広がっている。



統一1周年記念式典。スタンド中央はイエメン共和国のエンブレム（国章）である。鷲の胸にはコーヒーの緑の葉と赤い実が描かれている。両側の絵もコーヒーの実と葉。

一色であり、サウジアラビアの国旗はやはり緑地に剣とコーランの章句が染め抜かれている。アラブではないがイスラムのバン格拉デシュの国旗は日の丸とまったく同じデザインで白地の部分が緑である。

ではイエメンの国旗はどうだろう。統一までの北イエメンの国旗には確かに緑が使われていた。旧北イエメンの国旗は上から赤白黒の三色旗がベースになっていた、中央の白地の真ん中に緑の星が輝いていた。この星はイエメンの誇る緑を象徴していたのである。

一方、旧南イエメンの旗はどうだったかと言うと、やはり赤白黒の三色のベースは共通で、左側に青い三角が割り込み、その真ん中に赤い星が輝くというキューバやチェコの国旗のパターンである。赤い星はアラブ唯一のマルクス・レーニン主義国家を象徴しており、緑は使われていなかった。

ところで、この赤白黒の三色旗はエジプト、シリア、イラクにも共通であり、エジプトのは真ん中に鷲があり、シリアのは緑の星が二つ、イラクは星三つという具合になっている。つまりこの三色はアラブの国旗の基本的デザインなのである。しかしここに一つ問題がある。軍隊などでは普通、星が増えるほど階級が上で、星一つが少佐、二つが中佐、三つが大佐というぐあいになっている。またアラブの軍隊では少将以上は鷲のマークで表すことが多い。だから国旗を階級章に見立てるとエジプトが一番偉くて、北イエメンが一番格下ということになってしまふ。これは、アラブの源流を自認するイエメン人にとっては面白くないものだったに違いない。

さて、南北統一を果たした新生国家は新たな国旗を制定する必要があった。どちらかの国旗をそのまま使えば、それは一方が他方を併合したかのような印象を与えるのでぐあいが悪い。そこで、両方の共通部分であった赤白黒の三色旗でシンブルにまとめることにしたのである。イエメンの豊かさの象徴である緑の星を落とすのは残念だが、シリアやイラクより格下に見られるよりも、アラブのベシックである三色旗でシンブルにまとめるほうがアラブの源流により似つかわしいではないか、という意見が満場の拍手喝采を受けて通ったのであろう。イエメンに緑があることは言わずもがな、なのである。

水汲み

イエメンでは水汲みはすべて女の仕事である。水汲みといっても裏庭の井戸から水を汲むのではない。山のてっぺんの集落から険しい崖を下って谷底のワディー（涸れ谷）まで降り、井戸から水を汲み、今度はバケツ（ポリバケツや古タイヤをはぎ合わせて作ったバケツ）を頭に乘せたり両手に持ったりして崖をよじ登るのである。水汲み場から遠い場合、山道を下るのに三十分、水汲み場で順番待ちに三十分、帰りは重いバケツを頭に乘せて登りに一時間半、しめて二時間半かかることもある。水汲みは少なくとも朝夕の二往復必要なので、この場合、都合五時間が毎日水汲みに費



水場で水汲みをする女性。頭上のポリタンクは20リットル入りで「ダッパ」と呼ばれる。ガソリンの取引単位にも「ダッパ」を用いることが多い。

やされることになる。電氣のない田舎であれば一日の活動時間は日の照っているせいぜい十二〜十三時間である。そのうち五時間が水汲みにとられ、残りの時間で炊事、洗濯、育児、農業、家の掃除までするのは並大抵ではない。おまけに洗濯機も、掃除機も、電子レンジもないのである。

そんなに苦勞するなら、水汲み場に近いところに家を建てればいいではないか。当然の疑問である。しかし、イエメンの山岳地では井戸のそばに村を作ったりはしないものなのである。山岳地の井戸は谷あいのワディーにあることが多い。伏流水が流れているので井戸を掘ると容易に水が出てくるからである。しかし、周囲より低いところは敵に攻められた場合逃げ場がない。そんなところに家を構えればどうぞ略奪して下さいと言っているようなものである。だからできるだけ井戸から遠いところに村ができることになる。

その結果、女が多少苦勞することにはなるが、それが女・子供・家畜を外敵から守るための最上の手段なのだから仕方がない。命あつてのものだねである。水運びにロバが使えるときはまだ楽だが、ロバを使えないような急傾斜の山に住んでいたたり、ロバを持っていない場合には、すべてを女性による人力に頼らねばならない。イエメン山岳地での良い嫁の条件とは、たくさんの子を産み、文句を言わずに水汲みをすることである。山のてっぺんに住まなければならぬ以上、それは仕方がないことだったのである。

女性にとってありがたいこうした状況を改善するには水場を住居に近づけるか、住居を水場に近づけるかである。前者のためにはポンプとパイプを使って谷底の井戸から山のとっぺんの集落まで水道をひくか、村の近くに深井戸を掘ればよい。これは一九七〇年代にアラブ産油国による援助プロジェクトとして始められた。

日本も七〇年代の末から山岳農村にいくつもの井戸を掘ったり、山のおもとからポンプアップで山頂の村まで給水する上水道援助プロジェクトを続けている（これは日本の対イエメン援助の最初のものであった）。イエメンの山岳地の地盤は固いうえに、地下水位が低いので井戸を掘るには近代的な機械が不可欠なのである。

ただし上水道プロジェクトといっても各家庭にまで水道がひけるということは滅多にない。外国援助でやってくれるのは、村の数カ所に貯水タンクを設置し、そこに共同蛇口をつけるまでである。また給水時間や一人当りの給水量が限られている

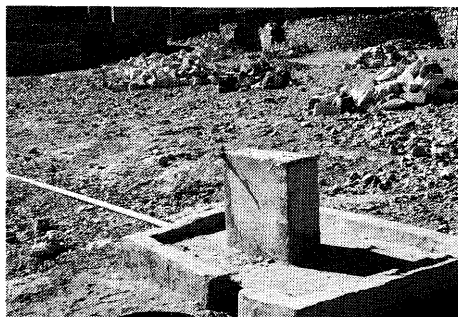


水を運ぶロバ。ロバは「ダッバ」を二つ運べるので人間よりも重宝である。（撮影・小平恵一郎）

場合が多い。しかし、ともかく家の近くで蛇口さえひねればきれいな水が汲めるようになったのである。

これまでのように山道を登り下りしないうすむのは革命的な進歩である。身重の体で（イエメンでは既婚の健康な女性はたいていの場合、身重である）重い水の入ったバケツを持って歩くのは重労働であった。そんな重労働から解放されるのである。それにこれまで水汲みに割っていた時間を、授乳やら育児やら、家の掃除やらに当てることができれば、衛生水準も向上するだろうし、これまた極端に高かった乳幼児死亡率も低下するであろう。さらに、女性に時間的な余裕ができれば、識字教育などの機会も得られやすくなるかもしれない。日本の井戸掘りプロジェクトで給水が可能になった村などを訪れると、別にぼくが何をしたわけでもないのだが、なんだかうれしくなるものだ。

水汲み労働改善の第二の方法は、村ごと山を下りてくることである。部族間抗争が激しかったり、内戦が激しかった頃にはとてもそういう選択肢はなかった。しかし、近年中央政



村に引かれた共同水道の蛇口

府の支配力の向上にともなつて部族間抗争が減つてきた。また自給自足の経済から小麦、缶詰、菓子、清涼飲料水、衣類などの輸入品を用いる生活が浸透してくるにつれて他の地域との往き来の必要性が高まつてきた。こうした変化を受けて、人々は新しいアスファルト道路ができると徐々に道路沿いの場所に下りてくるようになった。住居が少しでも下に移ることは、女性にとつては水汲み場までの距離が短くなることを意味する。そしてこのアスファルト道路の建設も諸外国の援助で行われる場合が多い。

井戸掘り・上水道プロジェクトや道路建設プロジェクトは水汲み労働から女性を解放する。この点でイエメン女性にとつて援助はまさに現代の福音と呼べるかもしれない。

ロバ

イエメンの田舎の風景につきものののが、ロバである。サナアの市内へは、ロバの乗り入れが禁止されているので、あまりロバの姿を見かけない。しかし、一歩でも市外に出れば昔どおりロバと人間とが共存する世界が広がっており、ロバ抜きには田舎の風景は語れない。

アラビアⅡ砂漠Ⅱラクダという連想ゲームが先入観としてあるかもしれないが、山岳部イエメンではラクダにはあまりお目にかからない。もちろん砂漠に行けばラクダはつきものだし、特に遊牧民にとっては彼らの生活と切っても切れないものである。しかしイエメンに限らず、遊牧民以外の定住アラブ人にとつては、ロバこそが日常生活においてなにより大切な運搬・農

耕・交通手段である。にもかかわらずロバは不当に低く評価されているような気がしてならない。「ロバヘヒマール」というのは、アラビア語では「愚か者」という意味である。日本語の「馬鹿」に相当するニュアンスで、日常生活でかなり頻繁に用いられる。

砂漠のアラブ人ヘブドウィン〕は彼らのパートナーである「砂漠の船」ラクダをけっして馬鹿にしたりしないのに、なんだって定住アラブ人は大切なロバをそんなに馬鹿にするのだろう。確かに、ロバはなんとなく動作が緩慢で、その表情もどことなくぼーっとしている。しかし、それにしても彼らの生活になくてはならない動物、言ってみれば人生のパートナーである。ぼくは常々ロバが冷遇されすぎているような気がしてならなかったのである。しかし、ある時そのわけが一瞬にして了解できた。ロバが馬鹿にされるのは、その鳴き声のせいなのだった。

初めて地方の農村に泊まりに行ったときのことである。朝、突然異様なわめき声があるので目が覚めた。寝袋にくるまって眠っていた四階の居間の窓を開けて外を覗くと、朝日のなかに舞い立ち始めた土ぼこりがちらちらしており、隣の家の前庭でロバが腹を上にしてのたうちまわりながら悲鳴をあげていた。そのただならぬわめき声に、ぼくは最初、病気の発作なのかと思った。しかしそのロバはしばらくすると何事もなかったように起き上がり、あらためて歯ぐきをむき出しにしながら再び同じ叫び声をあげた。ロバの鳴き声を聞いたのは生まれて初めてだった。

なんと形容したらいいのだろう。息を吸い込みながら喘ぎ喘ぎ金属質の音をしぼり出す。象が鼻を高々とふりあげて雄叫びをあげている最中に突然ひきつけをおこしたらきつとあんなふうだろう、と思うような声である。そのときぼくは、こんな鳴き声をいつもいつもしているんじゃない、かわいそうだが、ロバが人間から馬鹿にされるのは無理もないと思った。

ところで、ロバの使い道は大きく分けて三通りある。流通の手段、農耕の助け、そして水運びである。人間の乗用にはあまり役に立たない。

ほんの二十数年前まで、イエメンの交通手段は圧倒的にロバとラクダであった。都市間の距離は、何キロではなく「ロバで何日」という単位で測られていた。サナアからタイズまでは「四ロバ日」、サナアからホデイダは「五ロバ日」といったように。一般的に山岳地ではロバ、内陸部や紅海沿岸の砂漠地帯ではラクダが主として使用されている。ラクダのほうが足が速そうだが、山道ではロバのほうが速い。ラクダは狭くて険しい山道には向いてないのだ。逆に砂漠ではロバは頻繁に休憩と給水を必要とするので隊商には向かないのである。

したがってイエメン山岳地では、各地からコーヒーやカート等の農産物を積んでサナアに集まってくる商人たちはもっぱらロバを使った。ロバは背中に荷を乗せて黙々とのたのた歩くのである。

農耕用にはまず種蒔きの前、畑を耕すときに活躍する。板を組み合わせた鋤をロープで引つ

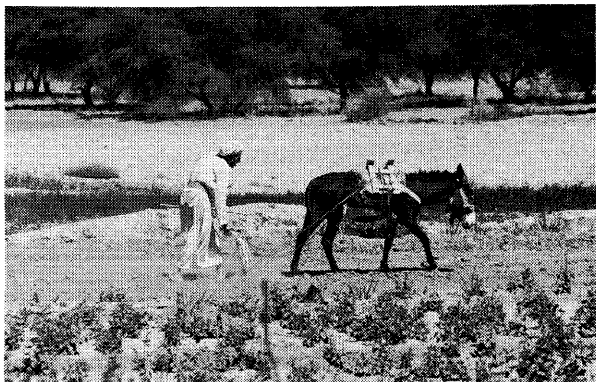


ロバの活用法四態 ①荷運び。身体が隠れるほどの飼料用の草を運ぶ。

張るのがロバの役目。この作業には、ラクダと牛も使われる。今でも田舎の畑で普通に見られる光景である。トラクター等の機械を持ち込もうにも一枚一枚の畑の狭いイエメンでは、畜力のほうが効率的なのである。ロバが活躍するもう一つの農耕作業は、収穫後の脱穀である。田

舎の村の一角には通常、石を敷きつめたバレーボールのコートくらいの脱穀場がある。ここに取り入れた麦やキビなどを並べ、その上をロバが何周も歩き回るのである。

しかし、この作業は近年機械力に取って替わられつつある。といっても脱穀機が導入されたわけではない。ロバで踏むより、トラックで踏むほうが効率が良いというのである。それにトラックなら荷台に子供たちが乗れるので楽しいというのも正直なところである。そしてどういうわけか、この脱穀用にはトヨタのハイ



②畑を耕やすロバ



③脱穀するロバ。石を引っ張って
脱穀場をぐるぐる回る。

ラックスが最も適しているという評判である。ハイラックスを設計した人にぜひ聞かせてあげたい話である。

水運びはロバの独壇場である。普通、水運びには牛やラクダは使われない。水運びのためには山道を登り下りしなければならぬからだろう。古タイヤのチューブで作った水入れを背中に振り分けにしたロバが一人でのたのた歩いている光景によく出会う。ロバは放っておいても道を知っているから大丈夫なのだ。水汲みは女の仕事である。ロバは女の強い味方なのだ。

この他に畑への往復の交通手段としてロバは活躍している。ロバは毎日通る道を知っているから人間は何もしなくてもロバに跨れば、自動的に体と農具を畑まで運んでくれるのだ。「自動車よりロバのほうが優れている」と日本人の



④古タイヤで作った水入れにたっぷりとお水を入れるとかなり重いのでよろよろ歩くことになる。

ぼくに向かって冗談を言うイエメン人が時々いた。理由は「かどでウィンカーを出さなくても、ハンドルを切らなくても曲がるから」である。確かにこれは自動車よりも楽である。この感覚で自動車に乗るからイエメン人は交差点でウィンカーを使わずに右左折するのだなど、ぼくは一人で納得したものである。おまけに駐車場なんかなくても畑にいたら、放っておけば、畑の周りの草を食べながら御主人様の仕事が終わるのを黙って待っている。

井戸から畑に水を汲み上げるポンプのドッドッドッドという音が規則正しく響き、時々発作のように口バが鳴く。イエメン農民はこうした音を聞きながら畑を耕すのである。

九十九折

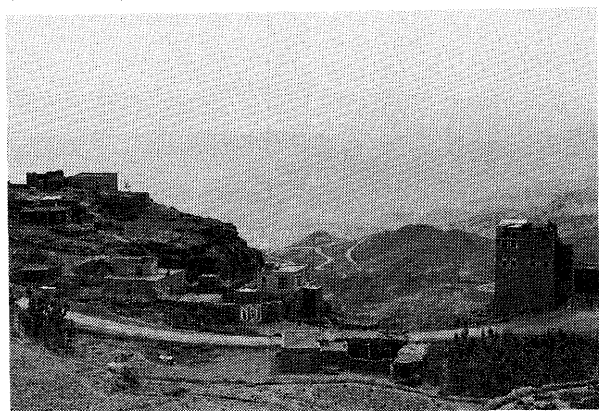
イエメン国内を旅行するには山道を車で移動するしかない。鉄道は一本もない。バスは主要都市間を朝と昼の二往復するのみなので、普通は自家用車で走ることになる。

サナアから紅海の港町ホデイダまでは、二一六キロメートルの距離である。直線で平坦な道であればたいした距離ではない。しかしサナアは標高二二五〇メートル、ホデイダは海拔ゼロメートルである。この間は岩山の連続であり、途中には三〇〇〇メートル近い峠もある。そしてこのサナア―ホデイダ道路は、日本では絶対にお目にかかれないような九十九折（つづら折）の道である。つづら折りと言うとなんとなくのどかな感じだが、けっしてなまやさしい道ではない。スリル満点、迫力絶大、まるで延々と続くジェットコースターのような、と言う人

もある。命がかかっている分、ジェットコースターよりこっちのほうがスリルがあるのは請け合いである。

意外なことだが、この道は中国の援助で、中国人労働者によって作られた。それは一九六一年のこと、これがイエメンで最初の舗装道路であった。初めての舗装道路工事だったので、イエメン国内にブルドーザーだのロードローラーだのの建設機械は一切なかったし、道路建設のために働いた経験のあるイエメン人はいなかった。そこで中国本土から大量の労働者と建設機械が運び込まれ、工事が行われたのである。工事は岩がちの急斜面を切り拓く難工事であり、ダイナマイトで発破をかけるたびに多くの犠牲者が出た。しかし工事中に死亡した中国人労働者はダイナマイトの事故によるものにとどまらなかった。

イエメン山岳地は部族社会であり、自分たちの領地は自分たちが守るといふ掟の支配する世界である。政



サナア＝ホデイダ道路。ヘアピンの連続である。

府の役人だろうと、勝手に領内を通過すれば撃ち殺されても文句は言えないのである。そんな山岳地のなかに、ある日突然ダイナマイトの音が鳴り響き、部族民たちが生まれて初めて見るブルドーザーがやってきて、悪魔のような力で山を切り拓き始めたのである。驚いて人々が集まると、これまた今まで見たこともない黄色い顔をした人間が大勢で自分たちの領地を掘り返しているではないか。アラビア語で抗議しても、中国人の労働者には通じない。労働者が中国語でなにやら弁明しても彼らにはそれが中国語であることさえわからない。ともかく、自分たちの領地が侵害されているのは明らかである。相手は丸腰の中国人だが、イエメン人にしてみればダイナマイトやブルドーザーは立派な武器である。イエメン部族社会のルールに則って、こうした侵略は力で防がねばならない。問答無用、ライフルでズドン、ということが実際にしばしばあって、このようにして亡くなった中国人の



道路端の中国人労働者の墓。サナア＝ホデイダ道路以外にも各地で中国人はイエメンの道路作りを行った。ハッジャにて。

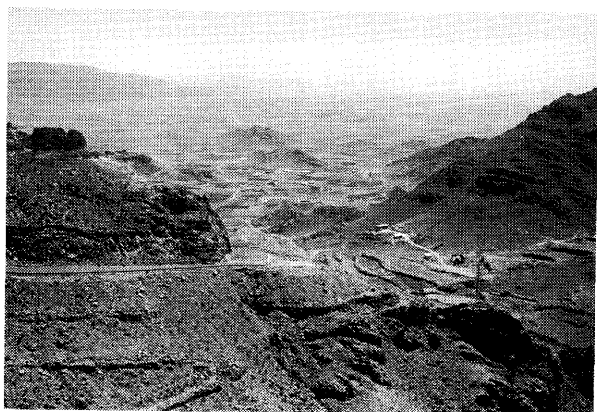
数は少なくない。

サナアIIホデイダ道路を走り始めてすぐの、サナア盆地の西のはずれに町を見下ろす山があり、その中腹に公園がある。この公園のなかに中国風の赤屋根、コンクリート製の東屋が建っていて、その周囲には工事中に殉職した中国人のための墓地があり、個人の名が漢字で記されている墓が三六基ある。日本人にとって、漢字世界から遠く離れたイエメンで東屋と漢字を見るのはなつかしくもあり、また哀れでもある。

ところで中国人は山岳道路作りが得意だそうだが、確かにこの道は日本人には作れない道路である。まず、ヘアピンカーブがたくさんある。もちろん九十九ではきかない。斜面が急なので登山電車のスイッチバックの要領で山肌を右に左にジグザグに往き来しながら、登り下りするのである。斜面の下を登っているときにはるか上を見ると、われわれより三十分も前に出発したトラックが、われわれとは反対の方向にのたのた走っているのが見える。ジグザクの折れ目は当然ヘアピンになる。これが連続するのだから、この道を走ればいやでもハンドルさばきは上達する。それだけではない。このヘアピン自身はかなり急な坂で、下るときには放っておくと崖下に投げ出されてしまうほどの傾斜なのである。だからこの道ではブレーキの腕前も上達する。さらにそのうえ道路が進行方向に対して左や右に傾斜している。こういう道路は日本にはない。つまり、下り右カーブに入る場合、車は前に傾斜し、同時に右にも傾斜しその姿勢



サナア＝タイズ道路の標高2800メートルにあるサマラ峠。
谷の向こう側の道は未舗装の生活道路である。



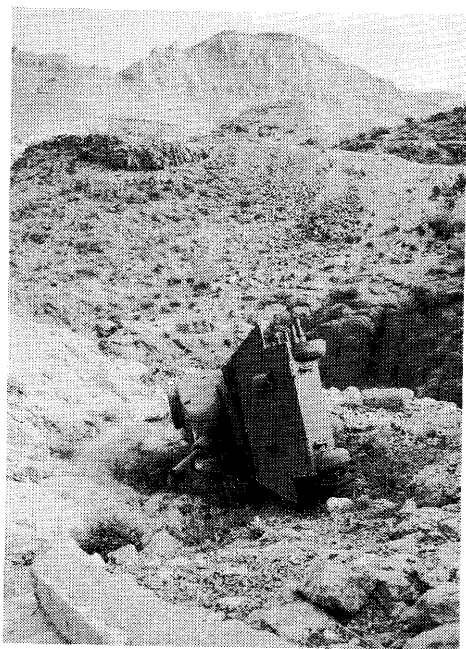
山を一気に下りる坂道。カーブの連続なので、
登りのトラックが1台いると後ろの車は前が見
えないために追い越しができず大渋滞となる。

で一八〇度のヘアピンに突入する。そして抜ければ直ぐに左に傾斜しつつ左カーブのヘアピンが待っている。この道では運転テクニククすべてのが試されるのである。

また、この道路では都市を結ぶ乗合タクシーがわが物顔でかつとばしている。スピード制限は法律上あるが、取締りをする警官は存在しない。ヘアピンカーブは彼らにとつては毎日通っている庭のようなものだから前から対向車が来るかどうかには頓着なく、カーブでは内側を走りがたがる。そこで、もしこちらがレーンを守ってカーブを曲がっていても、カーブの頂点で突然目の前に対向車が現れる場合がある。岩山を切り崩したカーブでは、向こう側の見通しはきかない。よけきれなければアウトである。こればかりはいくらこちらにテクニクがあっても防ぎようがない。つまり、運転テクニクばかりではなく、運も試されるのである。

もっともつづら折りの道での事故は正面衝突よりも崖からの転落のほうが多いようだ。この道を走っていると、はるか下のほうに車が転がっているのを見ることがある。一度落ちたら、急斜面なのでまず引き上げられない。車体は錆びるに任せて見せしめのように惨めな姿を曝しつつづけるほかはない。多くはスピードの出し過ぎで飛び出した自家用車だが、タンクローリーなどの重量車の場合、ブレーキが焼き切れて止まらなくなり、転落する場合もある。そういう場合は、車体はまるこげになっている。

そして多分このホ 데이ダ道路沿いでいちばん古くから転がっていると思われるのは、エジプ



道端の戦車。錆びた車体はさらし物のようである。

く場所に赤く錆びた車体を曝している。戦車は横転すると亀と一緒にでどうにもならないらしい。誰も戦車を引き上げようとはしないため、もう二十年以上ここに放置されている。周囲の部族民にしてみれば、自分たちがエジプト軍の近代兵器に勝利した記念碑としてここにわざわざ

ト軍の戦車である。一九六〇年代に王制派と共和国派で内戦があったとき、共和国派を支持したエジプト軍は援軍をホデイダに上陸させ、できたばかりの舗装道路を利用してサナアに向かった。王制派は、これを阻止すべく道路の封鎖と待ち伏せを行ったのである。恐らくその当時のゲリラ戦で戦車は道路から転落したのであろう。道路のすぐわきに転落した戦車は、車を停めて少し下りればすぐに手の届

ざ放置してあるのだろう。山岳部族民のプライドのなせるわざである。